

考古学論文の考古学（試論）

酒 井 龍 一

ねつぞう【捏造】事実でない事を事実のようにこしらえて言う事『広辞苑』

はじめに

第1章 考古学者と論文

第2章 違和感ある論文例と論文講読

第3章 論文収録に至る経緯

おわりに

は じ め に

『考古学者の考古学』（後出）の観点から、日本の「一流学術誌」が収録する「考古学の論文」に注目している。本稿では、「論文講読」や「論文執筆」に関する各種の文献を紹介しながら、諸条件によって、「論議の対象となる論文」を選び、諸問題を論じる。

第1章 考古学者と論文

考古学者

いうまでもないが、学者の職場は大学だけではない。研究所、企業、政府、小中学校などにも学者はいるし、まったくのフリーランサーとして自宅で研究に従事する在野の学者もいる。（新堀通也1981年『学者の世界』福村出版 11頁）

「考古学者」も同様である。その数は、ざっと10000人か。日本の特色は、職場の主体が大学・研究所・博物館でなく、地方自治体や財団法人（約7000人）という点である。大多数が、「文学部出身」というのも特色である。また、一般用語の「考古学者（Archaeologist）」でなく、「考古学の研究者」・「考古学の専門家」・「埋蔵文化財の担当者」・「発掘技師」・「遺跡調査員」など、様々な異名で自称・他称しているのも特色である。「考古屋」・「遺跡掘り」・

「発掘屋」・「掘り屋」・「墓掘り」・「穴掘り」・「宝探し」と自称する変人もいる。いずれも、堂々と、「考古学者」と名のるべきである。フリーランサーも、自宅に「～考古学研究所」と看板を出せばよい。

考古学の基本

先ず、「考古学者一般」の必読書を推薦する。Clive Gamble 2001『Archaeology : The Basics』Routledgeである。昨年三月、大英博物館の近辺に泊まり込み、「パブ巡り」を決定した際に購入した。これ一冊で、最新の『考古学：その基本』が掌握でき、「考古学の教科書」としても活用できる。£8.99。239頁。各自、講読していただくとして、裏表紙の「推薦文」を紹介する。昨今の「ベスト1」である。

Gamble's book provides an excellent introduction and evokes the excitement and interest of archaeological work. The best short introduction to the subject I know and one which will become a standard text for any teacher of archaeology or related subject. (Chris Gosden, Pitt Rivers Museum, University of Oxford, UK)

発掘原理主義者

「考古学は発掘だー」と叫んでいる「発掘原理主義者」に、Donald P. Ryan 1999『The Complete Idiot's Guide to Lost Civilizations』Alpha Booksを推薦する。「考古学の基本」・「発掘の方法」・「発掘の歴史」・「世界の古代文明」・「有名な掘り屋 (Diggers)」・「考古学の基本用語 (Jargon)」・「発掘のエピソード」を発掘・紹介している。\$16.95、£10.99。351頁。「掘り屋の魂」も教える「バイブル」、否、「コーラン」である。昨今の「ベスト2」である。

In *Diggers*, you'll meet some of the most movers and shakers in the study of the past, most for the better and a few for the worse. (「序文」)

遺跡発見と違和感

旧石器を見つけるためには一遺跡に最低数十回は足を運んだものである。旧人が残

した中期旧石器時代の座散乱木遺跡（国史跡）には三百回以上も通った。（藤村新一1997年「旧石器のみつけ方」『ここまでわかった日本の先史時代』岡村道雄編 角川書店 45-47頁）

あの藤村新一師による「遺跡発見」の原則は上記のとおりである。本来なら、その「情熱」に、いささかの異論はない。考古学者は「遺跡発見」を出発点に、額に汗して発掘し、得た考古資料や各種情報を研究し、その成果を「発掘報告書」や「論文」として発表する。

考古学者の考古学

「手前味噌」という言葉がある。拙稿1990年『考古学者の考古学』（財）大阪文化財センターの推薦が、これに該当する。同書は、『日本考古学者百年史（仮題）』の「第1章（草稿）」を、『考古学者の考古学』と題して刊行した。「考古学者の研究」の「手引き書」で、人気は高く、直ちに完売した。新世紀になっても有効である。動物考古学者の松井章（奈良文化財研究所）さんは、なぜか同書を大量に買い込み、今も処分に困るほど在庫中という。定価1800円。112頁。刊行から10年以上経過したが、「ベスト3」である。

通例の考古学と異例の考古学

考古学の種類はいくつあるか？ 私見では、「四種類」である。「通例の考古学」に加え、異例の「考古学の考古学」・「考古学者の考古学」・「考古学論文の考古学」がある。「通例の考古学」は、「遺跡を発掘し、出土した遺構・遺物を観察・分析し、得られた様々な情報をもとに、人類の歴史を復元する考古学」である。性格が異例の私は、これに加え、「考古学を発掘し、・・・する考古学」・「考古学者を発掘し、・・・する考古学」・「考古学論文を発掘し、・・・する考古学」にも取り組んでいる。本稿は、「考古学D」の実例である。

考古学A 通例の考古学（遺跡を発掘し、・・・する考古学）

考古学B 考古学の考古学（考古学を発掘し、・・・する考古学）

考古学C 考古学者の考古学（考古学者を発掘し、・・・する考古学）

考古学D 考古学論文の考古学（考古学論文を発掘し、・・・する考古学）

なお、「考古学者の考古学」といっても、考古学者の「遺体」を発掘することではない。考古学者の「魂」を発掘するのである。

考古学講読の始源

1984年、シリアのテル・ブラクで、紀元前4000年頃のものと思われる、ほぼ長方形をした二枚の小さな粘土板が発見された。(略)

これから私が述べようとする歴史は、全てこの二枚のつつまじやかな粘土板から始まる。(アルベルト・マングエル1999年『読書の歴史』柏書房 原田範行訳41頁)

「考古学講読」は、何から始めるべきか。テル・ブラクの「二枚の粘土板」からである。多言語作家・マングエルの『読書の歴史』も、そう明記している。私も、既に、初歩的学習を開始している。その一枚には「やぎ」のような、もう一枚には「羊」のような絵文字が、「10」を意味する「丸印」と共に刻まれている。かかる「粘土版文書の講読」は、かの「シュメール研究会」に参加するか、次の本を読み始めることが有効である。

過去を読む

Introduced by J. T. Hooker 『Reading the Past』 1990 British Museum Press は、「楔形文字」・「エジプトのヒエログリフ」・「線文字B」・「初期アルファベット」・「古代ギリシャ語碑文」・「エトルリア語」の入門書である。いずれも、考古学者なら一度は取り組んでみたい「言語」や「文字」である。もちろん、冒頭は、テル・ブラクの「粘土板」である。さる考古学者は、次のように実体験を語っている。「その全部に挑戦し始めたが、早速、目眩がした」。私は、同書を大英博物館で購入した。ところで、同レストランでは「大英博物館ビール」も飲める。さすがである。各種の粘土版文書と共に、その味も楽しんでいただきたい。

最強の研究会

拝啓 この秋の紅葉は、ことのほか見事でした。そして、いま、その紅葉もあらかた散り落ちて、京都にはまた静かな12月がやってきます。(第42回 シュメール研究会の案内より)

「シュメール研究会」は「最強の研究会」である。前川和也・京都大学人文科学研究所教授や、前田徹・早稲田大学文学部教授など、「世界の一流」だけで、「粘土板講読」を継続されている。アカデミックな雰囲気、一字一句に対する真剣な取り組み、高度かつ情熱あふれる論議は、「研究会はかくあるべし」の模範演技である。考古学の「スライド大会」とは異

なる。私も、「川柳句会」に参加している場合でない。今回、「案内状」が不明となり、気づいた時には既に終了していた。昨今、「鳴かず飛ばず状態」の私を象徴している。

人生の暗号

コーエン先生はその後にノーベル賞を受賞されましたが、当時はもうかなり年配だったにもかかわらず、鳴かず飛ばずの状態でした。(村上和雄1991年『人生の暗号』サンマーク出版 14頁)

「研究者一般」に同書を推薦する。考古学者は、「研究者の仲間」である。別に、「過去探検家＝探検家の仲間」と考える者もいる。「遺伝子研究者」かつ「研究人生研究家」の村上先生は、人生に「暗号」があり、発見すべきは「Something Great」と明言されている。その意味は何か？ お楽しみ。1頁ごとに「眼から鱗が落ちる本」で、研究人生の「指針」となる。定価1600円。昨今の「ベスト4」。付記すべきことがもう一点。「高偏差値よりも早起きがいい」と提言されている(162-166頁)。私は毎朝、四時起床である。

大学の先生と変身組

日本の大学の先生たちは、大部分が、余裕ある家の出であった。学者というものは、一つの道楽仕事であって、まあ好きなことをさせておけという親の余裕ある寛容から生まれてきている。(伏見康治1986年『学者の手すさび』みすず書房 65頁)

優れた「物理学者」にして「学術世界の大御所」の伏見先生は、そう申されている。反対に、テレビドラマに登場する考古学者は、「牛乳瓶の底のような眼鏡をかけた姿」とか、「押せば倒れそうな瘦身」とか、「あばら屋で、本や土器の山に埋もれながらの生活」とか、何となく「貧乏臭い雰囲気」である。確かに、そうした考古学者は実在した。

考古学者にも「大学勤務者」がいる。近年、文化財センターの「発掘技師」や都道府県市町村の「埋蔵文化財担当者」からの「変身組」が急増している。私も同類である。上司の「水野正好先生」も、その先駆者である。東京大学にも、「変身組」が急増している。「大学勤務者」には、新堀先生が、次のような「御言葉」を用意している。

今日、大学と科学はともに社会の中で大きな地位と役割を担うようになった反面、内外からのラディカルな批判と攻撃にされされている。これに気付かないのはよほ

どの鈍感か独善か、それともよほどの「専門馬鹿」かであろう。(新堀通也編著 1981年『学者の世界』福村出版 まえがき)

一流・二流・三流・四流

論文不採用率については、一般に一流誌と見なされるものほど高く、二・三流誌とされるものほど低いことが知られている。(根岸正光・山崎茂明編著 2001年『研究評価－研究者・研究機関・大学におけるガイドライン』丸善 152頁)

研究者に「一流」・「二流」・「三流」がある。ちなみに、「四流」はない。学術誌にも、「一流」・「二流」・「三流」がある。同じく、「四流」はない。「論文マニュアル」に、この区分がよく登場する。同書によれば、学術誌の主な「判別根拠」は「論文不採用率」で、科学雑誌『Nature』は約90%という。「序列」は英語で「pecking order」。なお、著述業には、「四流」があるらしい(清水幾太郎1972年『本はどう読むか』講談社現代新書 116頁)。

Pecking orderは、動物行動学の用語で、「強いトリは弱いトリをつつくが、弱いトリは強いトリをつつくことがない」という現象から、トリ社会の序列を示すものである。転じて、ここでは、学術雑誌の序列を表す。(前出 根岸・山崎 153頁)

一流の考古学者

日本の考古学者に「一流」・「二流」・「三流」の「判別根拠」はあるか。実は、ない。「自己申告制」なので、「自称・一流」・「自称・二流」・「自称・三流」である。「真の一流」は実在するか。実在する。海外では、「過去を読む能力」をもつ Ian Hodder や、日本では、「瓦仙人」の異名をもち、「古瓦を読む能力」がある藤沢一夫のような考古学者である。

違和感ある考古学者

各所に、「論文を読まない考古学者」や「論文を書かない考古学者」がいる。彼らは、それを「自慢」する傾向が強い。報告書を自宅に山積させ、真夜中に眺めては微笑んでいる「怪しげな考古学者」もいる。新本屋も古本屋も行かず、論文も読まず、論文も書かず、遺跡見学も、遺物実測もしない、「六無齋の考古学者」もいる。本棚に「謹呈」された報告書と抜き刷りばかり並べている「謹呈考古学者」もいる。「本が汚れる」と言って、本を読ま

ない「潔癖性の考古学者」もいる。究極は、「土器（石器）さえあれば、本も論文も無用」と豪語する「無本主義の考古学者」である。

大地講読

考古学者には、「大地講読」も大切である。下記は、宮城県上高森遺跡の第三次調査（1995年）での、有名な「石器埋納遺構」発見の様子である。やがて、「違和感」が判明する。

明けて三日目、腰痛が最悪で、四つんばいになりながら、K s - 1 層直下の発掘調査を続けていると、土を運ぶ人が私の目の前を通るときに、太陽の光が一瞬さえぎられ、楕円形の穴のようなものがぼんやりみえたのである。（藤村新一 前出 47頁 網掛け補記）

研究者の生活

婦人の心理学者のシャルロッテ・ビューラーの見解によると、業績を生み出す創造的生活 と、生の一瞬一瞬をゆたかに生きる生活 とは互いに対極にある。（島崎敏樹1994年『心で見る世界』岩波書店 61頁 網掛け補記）

通例、「一流学術誌」に論文が収録されると、「業績が評価」され、「一流」と公認される。単に、「遺跡発見」・「遺跡発掘」・「遺構検出」・「石器発見」だけではダメである。あの「捏造事件」が教訓となる。「捏造氏」は、「業績を生み出す創造的生活」の意味を、やや取り違えたようである。前者に対して、「ゆたかに生きる」というのは、「心」の問題である。

なお、「捏造事件」の経緯（2001年12月まで）は、河合信和2001年「偽造された日本人類史（上・下）－旧石器遺跡ねつ造はなぜ放置されたか」『朝日総研りポートNo.152・153』に詳しい。ところで、「捏造遺跡」は、昨年末は「2カ所」だったが、今年末には「42カ所」に急増していた（戸沢充則 2001年「旧石器問題」の検証はどこまで進んだか－日本考古学協会2001年度盛岡大会での報告全文『科学71巻11号』岩波書店）。やがて、彼が関係したすべての遺跡（186ヶ所）がそうと判明するだろう。

研究者の生活A 業績を生み出す創造的生活

研究者の生活B 生の一瞬一瞬をゆたかに生きる生活

創造

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֶת הַשָּׁמַיִם וְאֶת הָאָרֶץ:

ベレシート・バラール・エロヒーム・エツト・ハシャマイム・ヴェエツト

・ハアレツ（はじめに神は天と地を創造した。『旧約聖書』冒頭）

『旧約聖書』によれば、「創造」の意味は、「神が無から有を生み出す」ことである。ところで、キリスト様は「何語」を喋っていたのか？「アラム語」のようである。『旧約聖書』の大半は「古代ヘブライ語」だが、一部は「アラム語」である。ちなみに、私も、その「初歩的学習」を続けている（2000年「古アラム語によるセフィレ碑文の検討（1）」2000年『文化財学報 第18集』）。同論文を書いている途中、突然、パソコンが潰れ、「外字登録」した「古アラム文字」が抹消されてしまった。何かが、神の「怒り」に触れたようである。

創造的人間

その昔、創造者になれるのは、創造主である神だけだった。「創造的」という言葉が神ならぬ人間に対して用いられるようになったのは、やっと1870年代のこと。（セオドア・ゼルディン1999年『悩む人間の物語』森内薫訳 NHK出版 600頁）

当然だが、考古学者は「神」ではない。ただし、21世紀の今日、「創造的人間」になることや、「知の創造」は可能である。ただし、「業績を生み出す創造的生活」には、注意が必要である。研究者の創造的生活は「論文」に結集されるが、業績を生み出すために論文を書くのではない。「内容」が「業績」に相応しい場合、結果的に、「業績」と認定されるのである。「神の手・ゴッドハンド」と称して、「業績を創造」してはいけない。研究者による「創造」は「無から有を生み出す」ことではない。そもそも、各論文は、「先学の業績」の上に乗っている。従って、「引用文献」・「参考文献」・「謝辞」の項がある。

最高の栄誉

今日、『ネイチャー』は、おそらく、世界で最もきちんと編集され、厳格な論文審査が行われる専門雑誌となった。（竹内薫責任翻訳1999年『知の創造 ネイチャーで見る科学の世界』徳間書店 序）

研究者の「最高の榮譽」は、『ネイチャー』に論文が収録されることである。比較は不等だが、「考古学の論文」が『日本考古学』に収録されることに匹敵する。いかに「世界レベル」で「知の創造」がされてきたを知るには、同書が有効である。もちろん、「考古学の論文」も収録されている。ケンブリッジ大学のポール・メラーズ (Paul Mellars) による「ネアンデルタール人の運命」(234-242頁) である。「悩んでるたーる人の運命」ではない。

考古学者の悩み

各分野の研究者にも、様々な悩みがある。その中で、最も「気楽者」が考古学者である。「苦悩に満ちた考古学者」(註 九州の某先生は気の毒なことになった。ご冥福を祈る) や、「思索に耽っている考古学者」をあまり見たことはない。土器や石器や甕棺や、報告書類が貯まりすぎて、「ぼやいている考古学者」はいる。灼熱地獄で発掘していても、見学者は「結構な御趣味ですね」と誉めてくれる。世間には、こうした「固定観念」がある。

「私は人生のおちこぼれなんです」。インタビューに答えて、ジュリエットは自分の過去をこう評する(もっともふだんなら、人前でそんなことはまず口にしないのだろう)。でも、「おちこぼれ」になるよう決まっていた人生などありはしない。(セオドア・ゼルディン1999年『悩む人間の物語』森内薫訳 NHK出版 11頁)

考古学者の大多数は、「論文」に関し、苦悩したり競争してまで、「一流学術誌」に載せる必要もないと思っている。事実、編集委員が、「投稿原稿」が少ないと悩んでいる。そもそも、「考古学者一般」は、「世間の落ち零れ組」(もしくは「変人」と実感し、喜んでいる節がある。それを「明言」する者もいる。「名論文が書けない」と悩んでいる考古学者は、私見では、皆無である。大多数は、「普通の論文」か「論文のようで論文でない論文」(註 本稿は?) である。無関係な話だが、「ノーベル化学賞」のブリゴジンや、「有名な音楽指揮者」のシノーポリは、もともと「考古学者」であった。底辺からの「浮上組」である。

仮に、「悩める考古学者」がいれば、上記の講読を薦めたい。「プロローグ」は、「失われた希望をとりもどすために」。「エピローグ」は、「出会いを無益に終わらせないために」である。その間に、「各種の悩める人々」が登場する。676頁の大著である。

心のレイアウト

物質文明と精神文化の調和が二十一世紀の重要なテーマであるといわれる今、心の

問題は、私たちの人生だけでなく社会や文化そのものに深く関わる問題として、あらためて見直されようとしています。(私立学校教職員共済組合1989年『心のレイアウト』あとがき)

わが奈良大学でも、この「小冊子」が配布された。「副題」は「しなやかな適応を求めて」である。「悩める考古学者」には、まことに結構である。考古学にも、考古学者にも、「物質文明と精神文化の調和」が不可欠である。「モノを観察」しても、「モノに惑わされない考古学者」を心がけたい。ふり返れば、「列島改造論」以来、発掘と考古資料の急増により、モノに惑わされ続けてきた。二十一世紀は「心の考古学」が「主題」となる。

論文の初心者

この本の目的は、論文も小論文も書いたことのない人のために、論文の書き方のコツを教えることだ。(山内史朗2001年『ぎりぎり合格への論文マニュアル』平凡社新書)

「論文の初心者」に、同書を推薦する。だが、「何流」かは別にして、今日、考古学者であれば、「卒業論文」を手始めに、論文を書いた経験はあるだろう。「熟知している」と豪語する者もいるだろう。同書は、「一流」や「一流を目指す二流」には物足りない。

なれば、『知的な科学・技術文章の書き方—実験レポートの作成から学術論文構築まで—』(中島利勝・塚本真也1996年 コロナ社)を推薦する。同書は、「科学者・技術者」向けだが、「日本工学教育協会賞(著作賞)」を受けた名著である。「文系の考古学者」にも、「理系の文化財科学者」にも有効である。特に、「知的な～」という題目に魅力がある。

査読システム

一流学術誌には「査読審査システム」があり、「不合格」では収録されない。投稿は、「投稿規定」と「査読規程・審査基準」の厳守が不可欠。後者は「未公開」が通例である。日本を代表する「日本考古学協会」にも、厳しい「査読審査システム」があるようだが、「未公開」である。論文執筆の「拠り所」がないと、多くの者は「路頭に迷う」。論文の「質的向上・質的安定」めざし、「真の一流・自称一流(極めて多数)」以外の会員に、「論文マニュアル」の無料配布が切望される。無理なら、「査読規定・査読基準」の公開が必要だろう。

論文記念日

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日 俵万智
高飛車に出した仮説が宙に舞い 龍一

「三流」には、「論文マニュアル」でなく、別に、「魅力的な本」を推薦する。例えば、俵万智『サラダ記念日』（河出書房新社）、外山滋比古『知的創造のヒント』（講談社現代新書）、五木寛之『生きるヒント』（角川文庫）、吉本ばなな・高田宏・谷川俊太郎『不思議な三角宇宙』（廣済堂）、島崎敏樹『心で見る世界』（岩波書店）である。伊藤守・ほしばゆみこ『恋の法則100』（ディスカバー21）でもよい。梅棹忠夫・吉田集而編『酒と日本文化』（弘文堂）でもよい。更に、考古学川柳雑誌『時の扉』も有効で、希望者には無料配布する。考古学には、「人生マニュアル」も不可欠である。

誰かに「この論文はいいね」と言われた日が、各自の「論文記念日」となる。実現すれば、夜更けのバー（やや古い）で、自分に乾杯（ハイボールが最適。これも古い）すればよい。ただし、「三流」が、無理やり「一流」に変身すべく、「考古学の方法」を捻出しようと、デカルト『方法序説』（岩波文庫）などを読み始めると、奈落の底に転落する。

考古学の方法

この書物の本来の名称は次の通りである。『かれの理性を正しく導き、もろもろの学問において真理を求めるための方法の序説、なをこの方法の試みなる屈折光学、気象学および幾何学（原題略）』とあって、原文では三十一語をもってあらわされている。（上記の翻訳者・落合太郎による「解題」3頁）

考古学には、「理性」や「真理」より、「夢」や「ロマン」が似合う。「考古学に真理探求の方法があるか」の問に、答えは「否」である。同書は、「方法を模索」する人のために存在するが、解読は困難で、「題目」だけで失神する。代わりに、座禅を組むか、滝に打たれるか、大吟醸の奮発を提言したい。同書には、「ゆっくりと自分流の方法を考えよう」と書いてある。「ゆっくりと（熟成）」がキーポイントである。誰かの「模倣」はよくない。

考古学の革命

考古学に「革命」を起こしたい、R.ピンフォードのような「勇者」もいるだろう。まこ

とに結構である。「革命的考古学者」には、T.クーン1971年『科学革命の構造』中山茂訳みずず書房と、都城秋穂1998年『科学革命とは何か』岩波書店に加え、クーン・ポパー・ヘンベル・マートン・ラカトシュ他の著作を推薦する。ただし、「革命」は、「人格的勇者」や「単なる変人」だけではダメである。何かの「独創的活動」で、その「一歩」が開かれる。実例を紹介する。トマス・A・バスのインタビュー集『独創する科学者11人が語る「ヒト」の再発見』（1995年 茅野美ど里訳 三田出版会）である。11人の新世紀を担う「独創的研究者」が、独創の経緯を詳細に語ってくれる。その中に、エジプト生まれの元スミソニアン宇宙博物館館長ファルーク・エル＝バス先生による、「創造的活動」例がある。私もシリア・パルミラ遺跡の地下墓で同じ経験をしたが、「徒労」に終わった。

ファルーク・エル＝バスは、エジプトの大ピラミッドの下で最近発見された墓に穴をあけたが、べつに考古学的史跡や古代の宝物、それに見つかっていないファラオのミイラを探していたわけでない。空気を探していたのである。(269頁)

基本認識

As a result, no archaeologists I know believes there is one true past.

Clive Gamble (前出21頁)

「考古学の論文」を書き、また読む場合、上記が「基本認識」である。『考古学：その基本』も、『考古学者の考古学』も明記している。考古学に「真理」も「真実」もなく、時に「事実」も怪しい。その証拠に、『考古学辞典』にそれらの項目はない。考古学は「哲学」でも、「宗教」でも、「科学」でもなく、発掘で汗を伴うが、一種の「知的冒険」である。「夢」・「希望」・「ロマン」・「苦労」・「徒労」・「挫折」・「錯覚」・「誤解」・「捏造」・快感の項目を追加すべきである。なお、西日本、特に関西では、「他人の論文は怪しい」といって信用せず、「発掘報告書に客観的事実はない」と確信する考古学者が多い。

人生論

新興学問の雄は、皆読書の達人であった、と前に書いたが、これには今日の読書という通念からすれば異様なものである。読書するとは、知識の収集でなく、いかに生くべきかを工夫することであった。(小林秀雄『考えるヒント 2』文春文庫43頁)

考古学に確たる「方法論」はない。日本考古学は「文化系」（考古学専攻は文学部）で、「感性」が異なると、答えも異なる。考古学の論文を読んでも、「埒（らち）」が明かない。各者がいくら頑張っても、「小林行雄」や「小林達雄」に変身できない。いかに生きるべきか、「小林秀雄」が「考えるヒント」になる。

考古学者の論文

理科系の人からいわせれば、「文科の人は、のんびりしていてもいささか羨ましくもあるが、話をすると理論よりも雰囲気や感情のようなものが先立って共通理解が得にくい」（太田次郎『文科の発想・理科の発想』講談社現代新書195頁）

考古学の論文は、考古学者が読んでも、多くは理解し難い。佐原真師は、「わかりやすい文章で、考古学の論文を書こう」運動の提唱者である。人格は別にして、論文となると、「やたらに力んだ自己主張」、「謎の専門用語群」、「意味不明の分類」、「穴ボコや土器の寸法詳説」、「本当のようで本当でない年代」、「学名でない学名」、「不可解な屁理屈」、「独断」、「理論のようで理論でない理論」などが多い（註 以上、該当しない「名論文」を除く）。

論文頑張りすぎ症候群

論文で、実力以上に「頑張る」と、直ちに、次の「論文頑張りすぎ症候群」が発生する。全部を実行すると「100点満点」である。だが、自慢はできない（註 本稿は約40点）。

「誤字・当て字」(1)が増え、主語・述語が「一貫しなくなり」、(2)、「多弁・強弁」(3)になり、文献調査が「手薄」(4)になり、事実を「錯覚」(5)し、何ごととも確認を「怠り」(6)、学史を「無視」(7)し、文献を「精読せず」(8)、「思いこみ」(9)が激しくなり、学史・学説を「曲解」(10)し、文章が「走りすぎ」(11)、あの教訓を「忘れ」(12)、用語概念が「曖昧」(13)になり、論理に「矛盾」(14)が生じ、何ごととも「独断的主張」(15)をし、先学を「否定・非難」(16)し、「意味不明」(17)の図表やモデルを提示し、・・・(99)、気がつけば「詭弁・捏造」(100)になっている。

強弁三種類

各症候に、各「種類」がある。例えば、「強弁」は「三種類」（野崎昭弘1999年『詭弁論理

学』中公新書)である。「強弁性の強い論文」を読む場合、実に参考になる。考古学には、同一論文に「三種類を混在」させる「強者」もいる。「論文頑張りすぎ症候群」に関しては、将来、「別稿」を用意したい。

小児型 相手のいうことをきかず、ひたすら自己を主張する

二分法 いろんな考え方を十把ひとからげで黑白二分し、白を主張する。

相殺法 相手に賛成する風をみせながら、重箱の隅をつつき、それを帳消しにする。

がんばらない

ぼくは「がんばらない、がんばらない。それまでよくがんばってきた、もうがんばらなくていいよ、きみはきみのままでいいんだよ」と胸のうちで思った。(鎌田實 2000年『がんばらない』集英社 34頁)

「頑張らない」ようにと、同書を読んではいけな。涙が止まらなくなり、なぜか頑張りたくなり、デカルト『方法序説』に戻る悪循環となる。「元過激派」のお医者さんも、長野県諏訪中央病院を拠点に、頑張らないようにと、大いに頑張っている。「三流」は、無理に頑張るより、座禅か、滝修行か、赤提灯がよい。クラシックや絵や彫刻の鑑賞もOKである。森の声を聞くのも、詩を口ずさむのもよかろう。加藤登紀子の「ほろ酔いコンサート」でもよい。デカルト先生も、鎌田先生も、次のように述べておられる。

また、ごくゆっくりでなければ歩かぬ人でも、駆けあるく人や正しい道から遠ざかる人よりも、はるかに前進しうるのである。(前出 落合太郎訳 13頁)

仕事が終わっていたのでぼくがお酒を持ち込んだ。こうしてお酒を飲みながら自由な議論が始まった。名前は、「ほろ酔い勉強会」と命名した。(鎌田89頁)

セレンディピティ (serendipity)

投稿特集 偶然を幸運に変えた科学者からの便り (畠山泰英 企画・編集)

昨今、この言葉がよく使われる。実は、最近まで、その意味を知らなかった。『立花隆、「旧石器ねつ造」事件を追う』(2001年 朝日新聞社)に、「番外編 川柳で綴る「セレンディ

ピティ」なき考古学 酒井龍一」という題で、「考古学川柳」が収録された。「題目」は、編集者の畠山氏によるものだが、知らないままでは落ち着かない。早速、調査の結果、「思わぬ発見」という意味であることがわかった。ただし、同氏によれば、「瓢箪から駒」とは決定的に異なるという（同179頁）。しかし、私流に、一生懸命に取り組んでいれば、「瓢箪から駒」が出ることもある、という「格言」と解釈しておく。

イギリスのホレス・ウォルポール（小説家）が、この用語を創り、1754年1月28日、友人あての手紙で初めて使ったということが、外山滋比古『知的創造のヒント』（57頁 講談社現代新書）に書かれていた。「思わぬ発見」だったが、単なる「瓢箪から駒」の実例である。かの「ノーベル化学賞」の「白川英樹先生」は、模範的な「セレンディピティ」の実例である。「瓢箪に駒をつめたる埋納坑 龍一」

同人誌

「論文審査が嫌いな考古学者」には、「同人誌」を推薦する。考古学者には、「自由奔放人」が多い。「査読審査なんて蹴っ飛ばせー」と叫ぶ、「野人考古学者」もいる。事実、査読審査なき「同人誌」は無数にある。私も、一人で「考古学川柳雑誌」を発行している。実に気楽である。それに、同人誌から、一流に到達した先学も多い。ちなみに、「最古の同人誌」は、明治時代末期の『白樺』であるらしい（森下節1971年『同人雑誌』仙石出版社191頁）。「同人誌編集者」には、同書を推薦する。

知の編集術

「様々な情報」を、「論文」として「編集」する「同人誌編集者」には、同じく、松岡正剛2000年『知の編集術』講談社新書を推薦する。冒頭に、「1・編集は遊びから生まれる」・「2・編集は対話から生まれる」・「3・編集は不足から生まれる」、および、「1・編集は照合である」・「2・編集は連想である」・「3・編集は冒険である」を頭に置いて読むように指示がある。「六十六の編集技法」と「編集者の心構え」を学ぶことができる。

禁止事項

- 禁止事項① 文章の意図がつかめない事実や印象の羅列
- 禁止事項② 読み手が退屈する理屈攻め
- 禁止事項③ 読み手の興味をひかない一般論

(宮部修2000年『文章をダメにする三つの条件』丸善ライブラリー)

「良い文章」を書くには、三つの「禁止事項」がある。読売新聞の「上級記者」かつ「国語表現法の達人」の宮部先生が、そう指摘されている。①～③を総合すると、「自己中心の文章」となる。考古学論文に、かかる実例は多い。一読しておわかりのように、本稿は、「①」を実行している。はたして、その「意図」は理解されるのか。無理かも知れない。

論文=人間

論文の書き方は、清水幾太郎先生（1959年『論文の書き方』岩波新書）に学ぶ、が「定説」である。本稿が「短文主体」なのは、その指示による。だが、「凡人」が読んでも、同書は参考にならない。結論はこうである。「文章を作るのは、思想を作ることであり、人間を作ることである」（213頁）。ここで、「論文=人間」という「結論」を得た。

よき先輩・よき仲間

「論文をどう書くか」と題しながら、私はこの本では、文章表現上の問題以上に、よい先輩やよい仲間をもつことが大事だとか、自分という人間のどこに誇りを見出すべきか、といった、いわば生き方の問題に重点をおいた。（佐藤忠男1980年『論文をどう書くか』講談社現代新書210頁）

「映画評論家」かつ「論文研究家」の佐藤先生も、そう申されている。私は、「生き方探求」のため、「本屋巡り」と称し、毎夜、天王寺の「飲み屋」に通っている。

奈良大学文化財学科

八世紀の初頭につくられたこの法律（註「大宝令」の「学令」）によると、先ず首都の奈良に、大学一校を設置し、学生定員四百名、科目は明経・音・書・算の四つを置く、と定められた。（加藤秀俊1978年『現代教育考 独学のすすめ』文春文庫219頁）

「奈良大学文化財学科」は定員八十名。科目は「人生論+ α 」。大学でも、「独学的社会勉強」でもよし。「独学とは、主体的に学ぼうとする姿勢のことにほかならない」（222頁）。

「独学研究家」の加藤先生は、一橋大学を卒業後、京都大学・スタンフォード大学・アイオワ州立大学・ハワイ大学・学習院大学教授を歴任された。「大学大好き人間」である。

まちがったっていいじゃないか

本を読んでもるばかりでなく、自分でも、なにか書いてみたほうがよい。話を聞かされてばかりでは、受け身にすぎる。(森毅『まちがったっていいじゃないか』ちくま文庫189-190頁)

考古学者は、「論文」を書こう。「捏造論文」と「論文力みすぎ症候群」に注意すべし。

私は、生一本の生地の素裸の、自然な純粋な、かざり気も見えも何もない、生のまま素のままが、一番に好きです。(龍井孝作1959年『生のまま素のまま』櫻井書店3頁)

考古学者も、考古学の論文も、そういうことである。まことに結構である。

第2章 違和感ある論文例と論文講読

論文の選択

次の三条件で、論議の「対象論文」を選択する。

- 条件1 日本考古学界の「一流学術誌」に収録された論文。
- 条件2 「捏造事件」発覚後に執筆された論文。
- 条件3 「捏造事件」の教訓を明記した論文。

条件1 一流学術誌の代表は『日本考古学』(日本考古学協会)である。「異論」があれば、撤回する。『考古学研究』(考古学研究会)も有力だが、名誉を考慮し、前者と仮定する。査読審査で精選し、日本考古学の指針たる「名論文」を収録しているだろう。

条件2 「事件発覚」は、2000年11月5日(『毎日新聞 朝刊』)である。従って、以降～

2001年11月（本稿執筆開始）発刊の『日本考古学』が対象となる。『第11号』（2001年5月）と『12号』（同年10月）が該当し、今日、『13号』は未刊である。『第11号』は、「編集・査読・修正・校正・印刷・他」の時間的経過を考慮すると、それ以前の論文を含む可能性があり、除外する。結果的に、『第12号』が残る。

条件3 「捏造事件」に対する認識を明言した論文とする。私自身は「第14回」（2000年12月 福島県立博物館）と「第15回」（2001年12月 秋田市文化会館）の「東北日本の旧石器文化を語る会」に参加し、「解明経過」の実状を確認してきた。

収録6論文のうち、「若林論文」（2001年「弥生時代大規模集落の評価—大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に—」（35—53頁）が該当する（以下、「同論文」と呼ぶ）。

論文講読

文章の一行一行は、それを正しく理解するには、ただ漠然と眺めているのではなく、この本で解説するような具体的な方法を使って、文章を分解・整理してみるよい。（浜田文雄1996年『文章理解の方法』慶應義塾大学出版会 3頁）

「講読」とは、「書物を読み、その意味を説きあかすこと」（『広辞苑』）である。「論文講読」も同様である。だが、そればかりだと疲れる。「読み流す」ことも必要である。

高邁な宣言

先年の前期旧石器捏造事件が物語るように、検証手続きを省略した「マスコミ受け」優先の姿勢が、考古学そのものに大きな歪みをもたらすことは明らかである。やはり、相互批判の場がなければ、考古学に discipline としての社会的価値が疑われることを再確認する必用があろう。（同論文36頁）

「高邁な宣言文」に続き、「大阪平野の三遺跡群」を概観し、「拠点集落・大規模集落」が「複数の基礎集団」で構成されたとみると共に、「従来の拠点集落論」や「拠点集落＝大環濠集落」を否定し、自らの「新集落像」を主張している。「弥生都市論」など多岐の問題に言及しているが、核心は「図9左・右」（第4図）である。その「総括文」も紹介する。

以上、大阪平野の事例を中心に、大規模集落やその他の衛星集落の関係を説明する枠組みをさぐってきた。本論で導き出した既往の論説との最大の差異は、住居20～50棟程度で構成される基礎集団の粗密として遺跡群の実態を捉えなおしたことである。その結果、拠点集落とされてきた大規模集落が、単一構造ではなく、複数の基礎集団の集合体＝「複合型集落」であることが示せた。この結果、これまでの拠点集落＝大環濠集落というイメージが現象上では成立し難いことも明らかにした。
(同論文50－51頁)

論文の骨子

骨子は5点で、「遺跡群の観察」(骨子1) → 「既存モデルの否定」(骨子2・3) → 「新モデルの提示」(骨子4・5) という展開である。「展開の特徴」は、学史上の「既存モデル」を「否定」し、自らの「新モデル」の「正当性を主張」する点にある。「骨子1」は「方法提示」、「骨子2・3」は「学史総括」、そして「骨子4・5」は「見解主張」に該当する。本稿では、「学史」に関わる「骨子2・3」に限定し、論議を進める。

骨子1	大阪平野における三遺跡群の観察と評価	(方法提示)
骨子2	「従来の拠点集落モデル」の否定	(学史総括)
骨子3	「従来の拠点集落＝大環濠集落モデル」の否定	(学史総括)
骨子4	「基礎単位」概念の設定	(見解主張)
骨子5	「新しい大規模集落＝複合型集落モデル」の主張	(見解主張)

「自説主張型」論文には、学史の是非を問わない、主張中心の「自説主張型」と、学説否定によって自説の正当性を強調する「学説否定型」がある。同論文は、後者である。

主張の自由

「骨子1・4・5」は「主張」である。学問上、なに人にも、「自由な見解を自由に発表する権利」は保障されている。その「是非の検証」は、以降の「論議・論争」で行われる。的確な主張ならよし、そうでなくても、「必然的に間違いは駆逐されるので、正偽の判定は時の流れにゆだねればよい」(中島・塚本115頁 前出) のである。

対して、「骨子2・3」は、別問題である。「学史否定型」の場合、「学史総括」の「是非」を検証する必用がある。そこで「学史曲解」が発生した場合、そのまま放置すると、それが

「事実」として「誤認」される可能性が高いからである。

違和感 ($A1 = B = C = C'$)

同論文を概観する。例えば、「骨子2」に関する文章(43頁)に「違和感」がある。

酒井龍一は、拠点集落の構造を、居住などの基本生活領域の外部に機能空間としての墓域や生産域が展開するものとしてモデルを提示している(酒井1982)。旧来の拠点集落論では、大規模な単一の「基礎生活領域+機能空間」として拠点集落が存在し、その周囲に同様な構造体としての衛星集落があると考えられてきた。

文章は、(酒井1982)前後で脈絡が不明瞭である。そこで、下記のように分解する。「C」は、直後(43頁)に「拠点集落は単一構造体 = C'」とされ、追加する。網掛けは補記。

- A1 「酒井1982」
- B 「旧来の拠点集落論」
- C 「大規模な単一の基礎生活領域+機能空間として拠点集落」
- C' 「拠点集落は単一構造体」

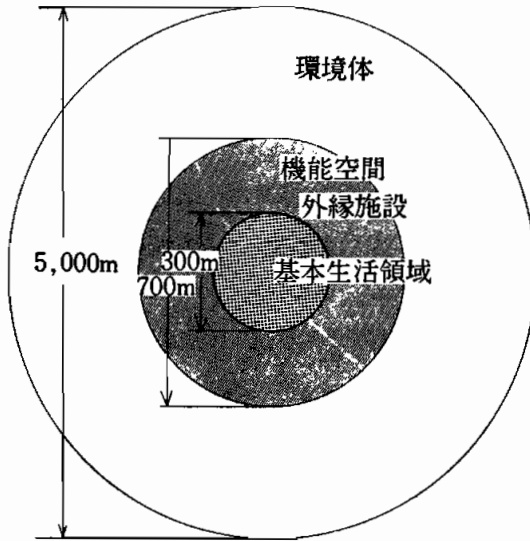
文章の流れは、「 $A1 = B$ 」である。「 $A1 \neq B$ 」だと、「B」に「出典明記」が必用である。また、文脈も繋がらない。「A1」が、「2001年」から見て、「B」の評価に問題ない。ただ、「学史総括」の引用文献が「1冊」では寂しい。続く文脈は、「 $B = C$ 」。そして、「 $C = C'$ 」。故に、「 $B = C = C'$ 」。全体で、「 $A1 = B = C = C'$ 」と総括されている。従って、同論文の読者は、必然的に、「 $A1 = B = C = C'$ 」と理解することになる。ここに、「違和感」の原因がある。同論文が、原文献「A1」の「該当部」を正しく提示しておれば、事態は大きく変わってくる。実は、「 $A1 = B \neq C = C'$ 」である。

原文献「A1」

「A1」の「畿内大社会の理論的様相—大阪湾沿岸における調査から—」(1982年『亀井遺跡』(財)大阪文化財センター)の該当部は、下記のとおりである(網掛け補記)。

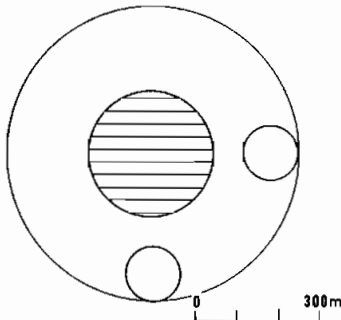
一個の生活集団は、複数の下位集団により構成されている。それぞれの下位集団

領域である。この範囲は、隣在する別の生活集団のそれとは、基本的には重複しない。

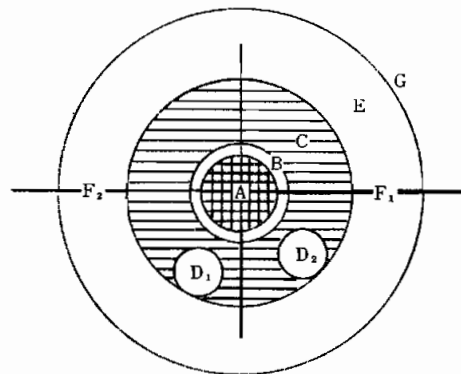


第1図 拠点集落の理論的枠組 (酒井 1982)

なお、本稿では触れないが、一個の生活集団は、複数の下位集団により構成されている。それぞれの下位集団は、生活領域内部において、住居をはじめとする生活諸施設および墓域の設定に独自の区域をもって、他とは区別される。従来調査では、下位単位の数は2～3個とみられる。複数の下位単位は、分節型線形構造をもって結合している。ちなみに、典型的な縄文集落は、求心型円形構造による1個の生活集団により構成されることが一般的であった。



第2図 拠点集落の理念モデル (酒井 1988)



第3図 拠点集落遺跡の基本構造概念図 (酒井 1990)

A: 基本生活領域 B: 外帯空間 C: 機能空間 D: 墓域
E: キャッチメントエリア F: 道 G: 外界

は、生活領域内部において、住居をはじめとする生活諸施設および墓域の設定に、独自の区域をもっており、他とは区別される。従来の調査では、下位単位の数は2～3個とみられる。(245頁の第183図－本稿第1図)

要点を整理する。

- (1) 拠点集落における生活集団は、「複数の下位集団」によって構成される。
- (2) それぞれは「独自の生活諸施設域や墓域」をもっている。
- (3) 下位単位の数は「2～3個」である。

更に、キーワードだけにする。

- | | | |
|-----------------|----------|--------|
| (1) 複数の下位集団 | } ⇒ 変身 ⇒ | 単一の構造体 |
| (2) 独自の生活諸施設や墓域 | | |
| (3) 下位単位の数は2～3個 | | |
| (原文献) | | (引用時点) |

原文献の(1・2・3)が、引用時点で「C' = 単一構造体」に「変身」している。同論文は、原文献を「変身」させた上で、下記のように、繰り返して「C'」を強く「否定」し、更に「自説の正当性」を「主張」する展開となる。

「C'」の否定

「本稿の分析に基づく、拠点集落は単一の構造体でなく」(同論文 43頁)

「大規模遺跡は単一集団とみなすこと自体に問題がある」(44頁)

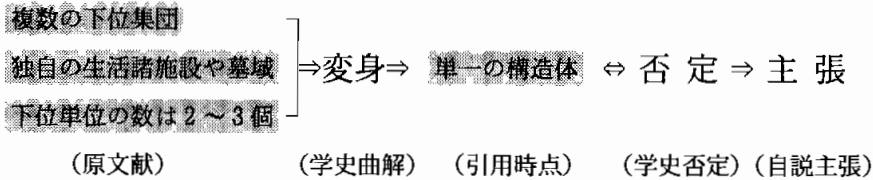
「また、拠点集落が単一の構造体でなく、」(47頁)

「大規模集落・拠点集落＝単一構造の環濠集落」という図式は成立し難いと考えられる」(48頁)

「その結果、拠点集落とされてきた大規模集落が、単一構造ではなく、」(51頁)

展開戦略

以上を整理すると、同論文全体の「展開戦略」は、下記ようになる。



禁じ手

参考文献を引用して、その研究結果の間違いを強く非難することは、許されない行為である。 (実例文 略)

このような記述は、独断的中傷であると認定されてもしかたがない。なぜなら、間違いだと指摘された研究者の反論の機会が、許可されていないからだ。

(中島・塚本 前出115頁)

『知的な科学・技術論文の書き方』(中島・塚本)が例示するように、論文には各種の「禁じ手」がある。「原文献」の内容を「根拠」なく「変身」させ、それを繰り返し「否定・批判」するのは、「致命的な禁じ手」である。

初歩的な禁じ手 「不注意」による誤読・誤解・錯覚・無視・明記漏れなど

致命的な禁じ手 「学史曲解」の上、それを「否定・批判」するなど

誤読

読者に誤解されても、的はずれな読み方をされても、著者には抗議することできない。(アドラー・ヴァン＝ドレーン『(後出)』121頁)

通例、「誤読」は「精読」によって防止する。また、「誤読」だけでは、問題は表面化しない。著者には、読者の誤読は不明なので、「函ぎしり」も「抗議」もできない。読者は、「誤読しない論文を書け」と、著者に開き直ることもできる。だが、原文献を「誤読」・「引用」し、それを論文で「否定・批判」すれば、学問上、「深刻な問題」が表面化する。ただし、短い該当部(1・2・3)を「C」と「誤読」するのは難しい。これは「誤読」でない。

各種変身

本来の「学史・学説・見解・認識・主張・モデル・主張・文献内容」が、「引用時点に変形」することを、「変身」と呼ぶ。これが発生すると、「真の議論・論争」は成立しない。

変身には、「本人」による場合と、「他者」による場合がある。原因には、「無意識」（誤解）の場合と、「作為」（戦略）の場合がある。「2」は、「致命的な禁じ手」である。

学史変身A 本人による変身

学史変身B 他者による変身

学史変身1 無意識（誤解）による変身

学史変身2 作為（戦略）による変身

変身防止策

引用する「原文献」を精読し、該当部を「引用文」か「要約文」で提示すれば、「変身」や「学史曲解」は防止できる。同時に、引用者自身が気づく。また、広く「文献調査」を行い、下記のような「関係文献」を「参照・引用」していても、かかる事態の防止策となっただけだ。

関係文献「A 2」（1988年）

「池上遺跡と畿内弥生セトルメントシステム」（『古代を考える 48』古代を考える会）は、池上曾根や四ッ池遺跡他を解説しつつ、拠点集落に墓域が「複数」あることを強調したものである。理念モデル（第2図）は、「中央の円圏（基本生活領域）」と「大きな円圏（機能空間）」、そして機能空間内の「二つの小さな円圏（墓域）」で構成している。

私自身の問題は、「小円圏（墓域）2個」を描いたことである。読者は、（1）「複数の下位集団」を「2つの下位集団」、（2）「それぞれ」を「二つの下位集団」、（3）「下位単位の数は2～3個」を「下位集団の数は2個」と理解する。当然である。本来は「2～3個」（複数）の意味だが、「1個」（単数）でない。この問題は、「図9左」の項で後述する。

関係文献「A 3」（1990年）

「拠点集落と弥生社会－拠点集落を基本要素とする社会構成の復元－」（『日本村落史講座

2 景観Ⅰ 原始・古代・中世』雄山閣)では、「拠点集落遺跡の基本構造概念図」(第3図)を提示し、下記のように述べている。上記文献と同様、「単一構造体・単一集団」を示唆していない。逆に、「複数単位」を示唆している。「図9左」の項でも後述する。

通例、基本生活領域の外側には **数群、主に二群の墓域** があり、これに対応する居住集団に何らかの **大区分** があった可能性は強い。(66頁)

引用文献

「学史総括」をする場合、熱心に「文献調査」し、「文献一覧表」を作成し、基本文献を「精読」し、正当に「引用・明記」するのが原則である。時に、「基本文献」を知らなかったり、読んだが「誤読」をしたり、精読したが「文献明記」を忘れていたり、頁が制限され、「文献抜粋」する場合もある。実は、私も該当者である(反省)。いずれも「注意」が必要である。

- 不備 a 収集不足 (基本文献の無視・黙殺)
- 不備 b 原典誤読 (学史曲解)
- 不備 c 明記漏れ (研究者黙殺)
- 不備 d 極端な抜粋 (研究者黙殺)

考古学的社会現象

現代のように本がたくさん出ていると、いったい何を読んでいいのか、分からないのが普通でしょう。そのために、何を読んだらいいかとか、どういう本がいい本か、といった情報、知識を提供してくれる本もたくさん出ているのですけれど、この種の本も種類が多すぎて、どれを買って読んだらいいかわからない(笑声) 始末なのであります。(百目鬼恭三郎1984年『読書人 読むべし』新潮社8頁)

昨今、考古学の論文が、「質的低下」中である(註 以下、該当しない多くの「名論文」を除く)。全国各地で無数の論文集や発掘報告書が発行され、「物理的(軍資金・能力・精力)限界」で、文献を「入手しない・できない」者が急増している。深夜に「コピーの山」を築いている「不審者」の多くは、それだけで読んだと「錯覚」する。また、入手しても、「精読しない・できない」者も急増中である。更に、「図版」は複写・活用しても、「本文」に無関心な者も急増中である。日本考古学が得意な「集成表」も、苦勞した先学のもの、を、「借

用+α」で発表する事例も、各所で頻出している。また、「孫引き症候群」も急増中である。はたまた、論文より、各地における博物館・資料館の『特別展図録』が重宝されている。

同時に、発掘報告書の「各種寸法詳説」に馴染んだ結果、論文に「寸法詳説」が蔓延し、「看板的解説文」と「論理欠如文」が急増中である。「考古学者急増」・「考古学普及」・「文献氾濫」・「発表機会急増」・「論議論争欠如」・「批評家不在」「家庭主義者急増」・「軍資金不足」などに、「時代的傾向」が相まった、しかるべき「考古学的社会現象」である。

読書の方法

優れた書物には、どんな分野のものであっても小さな世界がある。その世界は書き手のもっている世界の縮図のようなものである。(吉本隆明2001年『読書の方法』光文社10頁)

考古学者の大多数は「文学部出身」で、読書は「得意」である。実際には「苦手」で、「発掘専従」になった人もいる。人生様々である。そういう人には、紀田順一郎『知性派の読書学』(柏選書)を推薦する。ただし、多少、古くなったので、吉本隆明『読書の方法』を推薦する。これは、「本稿の執筆開始日」(2001年11月25日)に発刊された、実に新鮮な本である。関係ない話だが、「吉本隆明」も、娘の「吉本ばなな」も、読書は得意である。

本の三種

「清水幾太郎先生」(『本はどう読むか』講談社現代新書)に再登場いただく。本には、下記の三種がある(52頁)。

実用書 生活が強制する本
娯楽書 生活から連れ出す本
教養書 生活を高める本

本読みの4レベル

第1レベル 初級読書 初歩的な読み書きを学ぶ
第2レベル 点検読書 系統立てて拾い読みをする
第3レベル 分析読書 理解をすべく徹底的に読む

第4レベル シントピカル読書（比較読書法） 主題を見つけ、何冊もの本を平行して徹底的に読み取る

本の読み方に「第1～4レベル」がある。同書も、そうした読み方で、是非、各自で直接に読んでいただきたい（アドラー・ヴァン＝ドーレン1978年『本を読む本』ブリタリカ出版 外山滋比古・榎未知子訳）。

学史総括の作業

「学史総括」をする場合、まず、[定点A・B]の確認作業から始まる。「定点A」は、「従来の～論」の「創始者・論文・発行年」の確認であり、「定点B」は、「論文執筆時点」における「現在の～論に関する主要研究者や論文（自分も含む）」の確認である。

定点A 「従来の～論」の開始時点
↓↑ （学史）
定点B 「新しい～論」の提唱時点

次に、その間の「学史」と「研究現状」の把握に努める。前者では、「基本文献の収集・精読」を主体に、「関係資料・史料の確認」、「現物・現地踏査」。後者では、それらに加え、「研究者への質問・確認・面談」が必要である。後者には、「手紙・電話・ファックス・Eメール・宅急便・懇親会」も有効である。十分な「情報収集」が、「学史曲解」の防止策となる。

学史の把握A 研究経過の把握
学史の把握B 研究現状の把握

一方通行的論議

研究者が「死亡・引退」していると、「学史曲解」が発生しても、本人自身は「反論」できない。例えば、今日、「小林行雄・五様式体系」や、「山内清男・縄文型式学」を「否定・批判・修正」する場合、これは「一方通行的論議」となる。従って、引用者の責任で、「文献精読」が不可欠である。同時に、明らかな「事実」に即する場合を除き、「安易な非難」をしないことが原則である。今日、反撃されない「安心感」から、かかる「せこい論議」は頻繁である。そもそも、「真の論議・論争」は、両者が同一時空に「共存」していることが

原則である。そうでない場合、論文に先学を正しく「登場」させ、自分と「対等」に論議・論争する必要がある。好き放題は「禁じ手」である。

ボクシング

詩の朗読に「ボクシング」があるように、考古学にも「ボクシング」がある。研究者が「同一時空」だと、「学史曲解」が発生しても、直ちに「反撃」が可能である。例えば、「近藤義郎・弥生墳丘墓論」や「水野正好・埴輪芸能論」を「曲解」し、更に「否定」する場合を想定しよう。当然、嵐の「反撃」が予測できる。同時に、後者も怒濤の「再反撃」が可能である。「紆余曲折」の結果、やがて「決着」する。これが「真の論議・論争」である。かかる「学史曲解の実行」には、細心の「注意」と「覚悟」と「実力」を必要とする。あの「捏造事件」は、かかる論議・論争がなかった。

やり玉論議

また、上述の3遺跡群の分析において推定されるそれぞれの水田域が各居住域に隣接していることは、水系にそった集落群としての「農業共同体」(都出1970・1984)による協業の成果として各水田をみることも難しい。(同論文46頁)

このような状況からは、拠点集落の経済の外部依存体質を軽視し、すべての集団に自給的農村というイメージを担わせる都出比呂志の城塞集落論が成立し難い。(同論文49頁)

この視点が、弥生時代から古墳時代への変化プロセスを、首長権力によって血縁的關係から地縁的關係へと地域社会が再編される過程として捉えがちな旧来の言説(都出1970・1984)の問題点を超えるために重要と考える。(同論文51頁)

主論議(大阪平野・三遺跡群の観察・分析)のついでに、「学史・学説」や、「対峙する見解」などを、「独断的に云々」するのが、「やり玉論議」である。

同論文では、「弥生都市論」(広瀬和雄・乾哲也)、「単位集団」(近藤義郎)、「唐古鍵遺跡・環濠集落論」(藤田三郎)、「亀井遺跡・環濠集落論」(豊岡卓之・米田俊行)「主権・国家論」(寺沢薫)に加えて、特に、都出比呂志氏(「城塞集落論」・「農業共同体論」・「世帯共同体論」・「弥生～古墳時代移行論」)に関する「やり玉論議」が目につく。

主張本体と強く関係しない「学史・学説・見解」に「異議」を唱える場合、「別論文」が原則である。どうしてもという場合は、「独断的な一言」で済ませず、「相手の立場を十分に尊重」し、「有効点と問題点を明示」しつつ、「対等に論議を進める配慮」が大切である。

身内応援団

「身内・仲間・学友・同人・関係者・同調者」の見解を、「是非の検証」なしに、「他説否定」や「自説援護」に多用するのは、「身内応援団の乱用」（註 実例省略。各自、同論文を参照されたし）である。特に、「自説援護」への乱用は避けたい。なお、「実証的論文」の「自説援護・自説補強」には、主に「考古資料」を活用すればよい。

知的技法

再び、『知的な科学・技術論文の書き方』（前出）による「知的技法」を紹介する。あらゆる学問には、「若者有利の原則」がある。各者、「潤沢な時間」を持っている。「慌てず、騒がず、驚かず」の気持ちで、落ち着いて、「素のままの論文」を書けばよい。

先人の業績を尊重して、論旨展開の都合上その報告との相違を明確にする必要があるときには、**控え目な指摘**に留め、**公平無私な態度**で執筆することが、かえって論文の評価を高める結果にもなるのだと指摘しておきたい。（83頁 網掛け補記）

各種の拠点集落

ここで、「各種の拠点集落論」を整理する。

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 拠点集落論A | 田中モデル（田中による一連の研究） |
| 拠点集落論B | 同・類似モデル（それを踏まえた、他者による研究） |
| 拠点集落論C | 酒井モデル（酒井による一連の研究） |
| 拠点集落論D | 同・類似モデル（それを踏まえた、他者による研究） |
| 拠点集落論E | その他、「拠点集落」概念を用いたモデル（各者による） |
| 拠点集落論F | その他、「拠点集落論的」モデル（例 寺沢薫「母集落論」など） |

同論文が最も関係するのは、「拠点集落C」である。「従来の拠点集落論」と括れば、有名

な「田中モデル」も含む。「拠点集落論の開始」と言えば、通例、「田中1976年」を指す。南関東に端を発した「田中モデル」は、次のように「進化」してきた。

- 田中義昭 1976年「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究 87号』考古学研究会
- 1983年「南関東における初期農耕集落の展開」『島根大学法文学部紀要（文学科編）5-1』
- 1984年「弥生時代集落研究の課題」『考古学研究123号』考古学研究会
- 1996年a「弥生時代拠点集落の再検討」『考古学と遺跡の保護－甘粕健先生退官記念論集』同論集刊行会
- 1996年b「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究（伝統文化）第12号』島根大学汽水域研究センター

拠点集落論Cの終焉

2000年2月、大阪大学での『シンポジウム 弥生時代の人・社会・風土』（2000年シンポジウム実行委員会編）で、「拠点集落論Cの終焉」を宣言した。

池上・曾根遺跡の発掘で、「拠点集落」と称すべき弥生集落の実像の一端を体感すると共に、遺物論としての「石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」（1974年）と集落論としての「弥生社会の体系的理解に関する認識論」（1976年）をまとめることによって、将来に向けた大まかな研究戦略とした。以降、二十年以上、数々の作業を進めてきた結果、『弥生の世界』（1997年）をもって当初の目的を達成することができた。そして、西暦2000年を迎えた今日、新たな研究戦略を模索中である（「弥生研究戦略と課題」75頁）。

「高地性集落論」の後を受け、「1976年」に登場した「拠点集落論C」は、「拠点集落を基本要素とする弥生社会枠組モデル」の構築を目的とした「研究戦略（マクロレベル）」であった。若干の「貢献」をし、「1997年」に終焉した。同書に「全文献」を収録している。

新進気鋭待望論

学問上の「キーワード」の「賞味期間」は、「二十年程度」である。「高地性集落論」も

「拠点集落論」も、かの「新しい考古学運動」も同様である。今日、「弥生集落研究」の展開には、「拠点集落」に代わる「新しいキーワード」を踏まえた、「二十一世紀型の研究戦略」が切望される。機は熟し、「新進気鋭」登場のチャンスである。

「図9左」(黑白モデル)の点検

独り歩きする図のためにも論文の掲載図は卓越した完成度が要求されるのである。
(中島利勝・塚本真也1996年『知的な科学・技術文章の書き方』コロナ社 117頁)

ボーア、ディラック、アインシュタイン、ハイゼンベルグ、ポアンカレ、その他の人たちは、ある特定のモデルを受け入れるか拒否するかというとき、直感的および審美的判断が決定的因子であることを認めている。(ジュディス・ヴェクスラー編 1986年『形・モデル・構造』金子努監訳 白揚社17-18頁)

「本文」と同様、「モデル図」も極めて重要である。「モデル」は万全を期して作製し、「完成度の高い・美的な図」として提示するのが原則である。

同論文の「図9」(第4図)は、「左図」(従来 of 学説)を「否定」し、「右図」(自説の正当性)を「主張」する展開である。かかる「否定図」と「主張図」の並記を、私見では、「**黑白モデル**」と呼んでいる。「図9右」は、同論文著者の「主張」であり、本稿では是非を問わない。ただし、「図9左」は、一見して、顕著な「違和感」がある。

先ず、「キャプション」は、「従来の拠点集落と小集落のイメージ」と題されている。だが、「従来の研究者によるイメージ」とも、「従来の研究に対する著者によるイメージ」ともとれる。ここに、「違和感」の出発点(1)がある。同論文は、この「イメージ」自体を「批判」する展開なので、どちらかで事態が大きく変わってくる。

A案 拠点集落に対する「従来の研究者によるイメージ」

B案 従来の拠点集落論に対する「同論文著者によるイメージ」

(1)を 起点に、次の3点加わり、「違和感」を増大させている。

(2) 同図は、実際、同論文著者の「創作」(B案)である。「キャプション」の暗示により、同論文の読者は、「図9左」を、「既存モデル」と「誤解」して読みとる。こうした「黑白モデル」の提示法は、「不適切」である。

(3) 「モデル」に関する疑問点は、通例、「本文」を読めば解決する。だが、「作図者・作図根拠・モデルの妥当性」などの言及はない。「不作為の行為」(下記)である。

(4) 「従来のイメージ(モデル)」と題して「批判」する場合、実在する「既存モデル」を「引用・提示」するのが原則である。だが、同論文著者による「創作モデル」を提示したため、ここに「学史曲解」(変身)が発生している(後述)。

不作為の行為

(3) については、下記の「注意事項」が参考となる。

論文中に記述すべきことを、あえて記述しない不作為の行為も禁止事項だと指摘しておきたい。例えば、研究論文の信頼性や独創性の本質に関連する不備や弱点に触れていない場合などはそれである。(中島・塚本 前出 115頁)

既存モデル

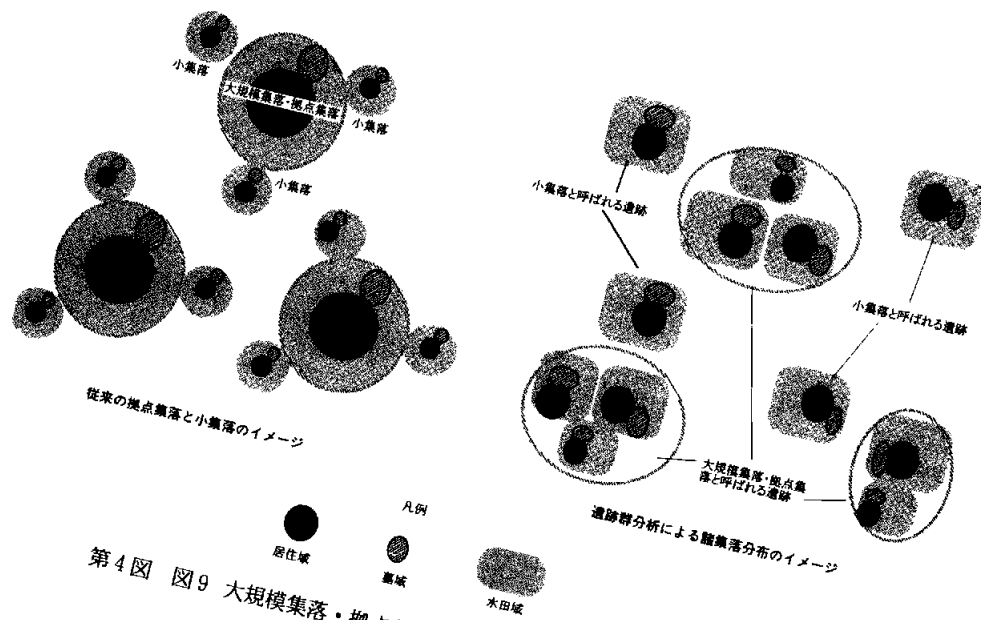
同図に最も近似する、実在の「既存モデル」は、先述の文献「A3」中の「拠点集落遺跡の基本構造概念図」(第3図) + 「文章」である。ただし、同論文に、引用・言及はない。「基本生活領域」は、既に紹介したので、「機能空間」に対する認識を提示しておく。

生活領域と重複しさらに広がる機能空間は、水田や畑・加工場・墳墓・祭祀場・広場・倉庫・水路他、生業や祭祀他、各種の「機能施設」がパッチワーク状に隙間なく設けられ、全体として完全な「人工景観」をなす。遺跡中央部ではそれらは住居等の生活施設と混在し、その外側では各種機能的な遺構・遺物類が重点的に分布する。(拙稿 1991年 前出68頁)

「機能空間=水田域」ではない。「従来の～イメージ」の「作図根拠」は、解説がないので、不明である。明らかに、上記の「既存モデル」(モデル図+文章)とも異なる。

「図9左」の問題点

「従来の～イメージ」と題する限り、「実在の学史・学説」に対し「正確にイメージ」す



第4図 図9 大規模集落・拠点集落をめぐるモデル (同論文縮小複写)

ることが原則である。同図の「違和感」は、「既存モデル」(第3図)との関係(a)と、同論文の「本文」(前出)との関係(b)にある。後者は、同論文内の「不整合」だが、本稿では不問とする。対して、「a1・a2」は、「学史曲解」である。

- 問題点 a 1 「機能空間= 水田域」という「既存モデル」はない。
- 問題点 b 1 本文の「機能空間」が、図では「水田域」に「変身」している。両者は「不整合」である(不問)。
- 問題点 a 2 「機能空間中に 墓域一つ」という「既存モデル」はない(前出)。
- 問題点 b 2 本文では「拠点集落=大環濠集落」を強調しているが、図に「環濠」の設定がない。両者は「不整合」である。

イメージ

己れのイメージ界にはまた、閉口させてやりたい人のイメージもある。(藤岡喜愛 1974年『イメージと人間』NHKブックス153頁)

先述のように、「否定・批判」の対象を、「実在のモデル」でなく、代替の「創作イメージ(モデル)」とする場合、「正確にイメージ」することが不可欠である。「イメージ」の「根拠」も明記すべきである。この時点で、「変身」や「学史曲解」は回避できる。「学史曲解」した

「創作モデル（イメージ）」を提示し、これを「否定・批判」する戦略は、「致命的な禁じ手」である。「図9左・右」は、下記のように整理できる。特に、「学史否定型」の論文では注意すべきである。

「従来の拠点集落論」⇔「図9左」（創作イメージ）⇔否定⇔「図9右」（正当性主張）
（学史曲解）（自説主張）

自作自演

論文は「違和感なき（正当な）戦略」を内包する。時に、「違和感ある（不当な）戦略」が登場する。同論文は、後者である。先に検討した「本文」と、この「モデル（イメージ）図」を踏まえ、同論文全体の展開は、次のように「復元」できる。学史の実状を離れ、自ら「従来の～イメージ」を描き、それを自ら「否定」するのは、「自作自演」である。

- | | | |
|------|------------|--------------------|
| 第1段階 | 遺跡群の検討 | →（自由） |
| 第2段階 | 「A1」を变身 | →（禁じ手ー学史曲解） |
| 第3段階 | 「A2・A3」を無視 | →（自由ーできれば引用・参照すべし） |
| 第4段階 | 「A1」を否定 | →（禁じ手ー自作自演） |
| 第5段階 | 「図9左・右」を並記 | →（禁じ手ー学史曲解・自作自演） |
| 第6段階 | 自説の主張 | →（自由） |

基本用語の退化現象

「本文」や「モデル図」と同様、「基本用語」の使い方（「用語法」）も重要である。「基本用語」は、「学史上の基本用語」と、「自分が創作した基本用語」に大別できる。例えば、同論文の「基礎単位」は、同論文著者の「創作」（基本用語b）である。これは「主張」なので、本稿では、その是非を問うことはない。「同一用語」でも、研究者が異なると、「意味」も異なる場合もある（註 考古学では頻繁）。

基本用語 a 学史上の基本用語

基本用語 b 自分が創作した基本用語

同論文における「基本用語 a」の使い方にも、一見して、「違和感」がある。むしろ、「面

白い」。拠点集落概念の中核をなす「基本生活領域」は、同論文に度々登場するが、「内容」の理解もさることながら、次第に「変身」している。「用語法」に「形の類似性にもとづくセリエーション」は不要である。典型的な、「基本用語の退化現象」例である。

「基本生活領域」(43頁) → 「基礎生活領域」(3行下) → 「基礎生活域」(8行下)

更に、「2.1. 基礎生活領域の規模」と題する「節」では、次のように、「三種類を混用」している。「混浴」は結構だが、「混用」は避けたい。これでは、「誰の用語法」だかわからない。同じく、典型的な「基本用語の退化現象」例である。

「基本生活領域」(1回)

「基礎生活領域」(3回)

「基礎生活域」(1回)

基本用語の退化現象A 原用語から連続的に変化していく

基本用語の退化現象B 原用語の類似語が混在する

基本用語の使い方

概念は言葉をもって記述する。学問的にきちんとした形で記述したい場合、定義(definition)を使い、この定義では概念を既に定義付けしてある用語をもって記述する。(クリスティアン・ガリンスキー1987年『ターミノロジー学』尾関周二訳 文理閣 16頁)

学史上の「基本用語」は、特にそうである。上記の実例は、「論文講読」における「初步的注意事项」である。論文講読には、正確な「抜き書き」作業も有効である。

考古学に学名はない

考古学に、確たる「学名」はない。別に、「呼名・通称・符丁・愛称・仮称・記号・異名」や「便宜的名称・用語」はある。「包丁でない」のに「石包丁」とか、「縄文晩期の深鉢=弥生早期の甕」とか。「誰そのの～型式」は、「誰そのの～型式」と異なるとか、同じとか。同一語でも、各者で定義が異なる場合が多い。検討すれば、「時代区分」も「型式分類」も

「編年表」も、似た実状にある。考古学で「真の論議・論争」が実現しない原因である。

「拠点集落」・「基本生活領域」・「機能空間」は、弥生集落を理解するために、「作業仮説」として設定した「便宜的用語」である。

「拠点集落＝環濠集落」は存在したか

この結果、これまでの拠点集落＝大環濠集落というイメージが現象上では成立し難いことも明らかにした。(同論文 51頁)

「自説強調」が過ぎると、対極に、思わぬ「固定観念」が発生する。同論文は、上記の「主張」も繰り返している。かかる主張は「自由」だが、学史上、「拠点集落＝大環濠集落」モデルは存在せず、さしたる「固定観念」もない。既出の拙稿から例示する。

その(基本生活領域の一補記)外縁には、人為的な大溝や空間、あるいは自然的な湿地・河川・傾斜地などの可視的な外縁施設がとりまく。柵、ヘイ、土塁、林なども想定できるが、まだ検証された事例はすくない。(1982年 244頁)

生活領域の外側付近一帯には、住居等の生活施設とは別に、幾条もの大溝・土塁・水路・河川・流路・斜面地等が発見される。発掘でこれらの遺構が多数発見されると、そこを生活空間の外縁部と理解してよいだろう。・・(略)・・居住域をとりまく物理的・視覚的・心理的な「結界空間帯」となっている。(1990年 67頁)

拠点集落に、「環濠」があれば結構、なくても結構である。「拠点集落」は、「各地域の核となる継続的で大規模な集落」といった「作業仮説」で、「環濠」は「絶対条件」でない。時に、大溝を環濠と「推定」したり、環濠でないかと「検討」する場合もある。拠点集落の説明に、環濠集落を「例示」する場合もある。しかし、あくまで「便法」であって、「拠点集落＝大環濠集落」という強い「固定観念」によるものではない。

「拠点集落遺跡の基本構造概念図」は、理論的に、「円圏モデル」で提示する。各遺跡の実状は、「自然地形の実状に起因して実際にはその平面形は多様」(1990年68頁)である。

いい過去を創った今日のご満悦 龍一

多くの難関を突破して、一流の学会誌・学術誌に自分の研究結果を発表することは、

研究を志す者の夢であり、ロマンである。(古谷野・長田 前出174頁)

『日本考古学』に論文が収録されたら、考古学者の「夢」と「ロマン」の一つが実現したことになる。そうしたことが実現するから、「過去指向の考古学者」も、「未来指向の考古学者」に変身できる。まことに結構である。

三流研究者

例え却下されても、厳しい修正要求を突きつけられても、二流の学術誌や査読システムのない紀要などに逃げ込むようでは、研究者としておしまいである。(古谷野・長田 前出174頁)

通例、「一流学術誌」に挑戦しないと、「一流」になれない。「二流学術誌」にも投稿しない者は、「三流」である。否、上記のように、両氏の判定では、「おしまい」である。

実は、「匿名希望」の私である。「自分史」を振り返れば、各種分野の「独学愛好者」なので「初歩的独習」ばかり積み重ねてきた。その結果、これといった「論文」を「査読システム」が存在する「一流学術誌」に投稿した経験がない。最近、「パルミラの有名人・ハイラン」と題する論文(2001年『文化財学報 第19集』奈良大学文化財学科)を書いたが、「自己評価」は「まあまあ(Bー・中の下)」であった。「三流」にとって、「二流」への道は遠い。ただし、高村光太郎の詩「道程」によって、将来に「希望」はもっている。

なお、本稿掲載の『文化財学報』は、「一・二・三流」は別にして、「査読審査システム」はない。新進気鋭の栗田美由紀助手が、遅筆専門家の私達を優しく叱咤激励し、心中で審査し、孤軍奮闘で編集業務して下さっている。心から御礼申し上げる。御礼。

第3章 収録に至る経過

投稿規定

『日本考古学 第12号』発刊の経緯を探る。

通例、日本考古学協会員の「投稿者」が、下記の「投稿規定」(毎号掲載)を参照し「投稿」する。この「受付後の処理システム」(網掛け補記)が、通例の、「査読審査システム」に該当する。ただし、実体は不明である。

考古学協会員になるには、「自薦」か「他薦」で申し込み、「資格審査委員会」による「新入会員資格審査」を経て、合格者は『会報』で氏名が公開され、『会員名簿』に掲載される。「何か問題」ある場合、入会できないこともあるらしい。

1. 投稿資格：原則として日本考古学協会会員に限定する。但し、編集委員からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
2. 原稿の種類：論文、研究ノート、その他編集委員会が認めた種目のみとする。
3. 投稿手続：投稿者は、必ず別紙「送り状」を添えて日本考古学協会事務局まで送付する。
4. 受付：編集委員会が原稿を受け取った日を「受付日」とする。受付後「預り条」を送る。
5. 受付後の処理システム：採否につきましては、編集委員会にご一任ください。
6. 別刷：掲載者には、掲載雑誌3部と別刷50部を贈呈する。其れ以外の別刷については、自己負担とする

原稿募集

通例、「原稿募集」案内が掲載される。『第12号』も同様である。しかし、下記のように、「締め切り日」が混乱している。なぜか「1ヶ月」早くなり、投稿者予定者は、若干の「違和感」を覚えただろう。「締め切り日」は「延長」が定番だが、「早まる」ことは珍しい。通例、「締め切り日」を目標に論文を書く。論文を完成させた後、投稿先を探す「余裕派考古学者」もいるが、極めて少ない。なお、『文化財学報』には、特に「締め切り日」はない。

第11・12号の原稿を募集します。締め切りは2000年11月30日・
2001年4月30日です。(『第9号』149頁)。

第12・13号の原稿を募集します。締め切りは、2001年3月31日・
2001年10月31日です。(『第10号』41頁)

受付月日順収録？

本号には、論文6編、研究ノート2編、発掘概要2編を掲載いたしました。なお、他に論文と遺跡紹介の投稿がありましたが、本号のボリュームの関係から **受付月**

日順により次号送りにさせていただいたことをお断りします。

『第12号』の「編集後記」は、そう明言している。「受付月日順」も結構だが、「一流学術誌」なら、「優秀順」という選択肢もある。「巻頭論文」という「荣誉」もある。

「発刊日」は下記のとおり。この間に、「発刊の経緯」がある。

2001年3月31日 原稿締切り

↓ (経緯)

2001年10月6日 発刊

受理日

各論文の末尾に、「受理日」の明記がある。「締切り日」から「3ヶ月後」。「発刊日」の「3ヶ月前」。経緯の「中間点」である。不思議なことに、「受理日」は「投稿規定」にない。「投稿規定」にある「受付日」でなく、謎の「受理日」が明記されている。

萩原論文 【受理】 2001年7月11日】

忍澤論文 【受理】 2001年7月2日】

若林論文 【受理】 2001年7月3日】

八木論文 【受理】 2001年7月2日】

吉澤論文 【受理】 2001年7月5日】

荻野論文 【受理】 2001年7月6日】

受理の特異日

『第12号』にとって、「7月2～11日」は「受理の特異日」である。何があったのか。

2001年3月31日 原稿締切り

↓ (経緯・前半)

2001年7月2～11日 【受理日】

↓ (経緯・後半)

2001年10月6日 発刊

他学会の「受理日」

「日本考古学協会」の「受理日」は不明だが、兄弟学会の「日本文化財科学会」と「文化財保存修復学会」では、以下のように規定している。

日本文化財科学会「考古学と自然科学」投稿規定（『第40, 41号』に掲載）

- 5) 投稿締切は毎年3月および9月末日とする。原稿が編集委員会に届いた日を受理日として掲載原稿に明記する。

文化財保存修復学会「古文化財之科学」投稿規定（『第45号』に掲載）

5. 投稿論文は編集委員会宛に送付することとし、編集委員会到着の日を受理日とする。投稿論文の締め切りは、毎年9月末日とし、発行日は、翌年3月31日とする。

日本考古学協会『日本考古学』投稿規定

4. 受付：編集委員会が原稿を受け取った日を「受付日」とする。受付後「預り状」を発送する。

事実判明。同じ「受理日」でも、学会によって意味が異なる。「受理日」は「学名」でないらしい。考古学協会の「受付日」は、両学会の「受理日」に該当する。

「受理日」は「受理日」？

本稿は、「考古学の論文」である（註 そうは見えない）。ここで、「考古学的観察」を実行する。目的は「違和感」の発見である。対象は、例えば、『古文化財之科学 第45号』中の「受理日」である。結果は次のとおり。なぜか「印刷日」の後にも、「受理日」はある。

受理日1999年11月20日（投稿原稿が編集委員会到着の日）

2000年2月8日

2000年7月12日

2000年10月2日

2000年12月20日

2000年12月21日

2001年1月15日

2001年1月22日

2001年3月8日

印刷日2001年3月21日

2001年3月22日 (違和感)

2001年3月22日 (違和感)

発行日2001年3月25日

解決法

「違和感」が発生しない「知的方法」を提示する。論文に「受理日」を明記しないことである。他分野の「一流学会誌」に、「受理日」を明記しない実例は多い。

2001年5月18日・委員会報告

小松委員から、『日本考古学』第11号の販売価格の決定ならびに、2001・2002年度査読委員候補案の説明があり、査読委員候補者は原案通り了解された。(『日本考古学協会 会報No.143』2001年7月1日発行 72頁)

「駒沢大学会館2階2-1で開催された委員会」に関する報文である。ここで、「査読審査システム」の存在が確認できた。『第12号』収録論文も、「査読審査」を受けることになったようである。諸点を整理する。

- 事実1 「査読委員候補」がいること
- 事実2 「査読委員候補」が「委員会」で承認されること
- 事実3 「二年間の査読委員候補」が「一度」に承認されること
- 事実4 「査読審査」があること
- 推測1 事前に「編集委員会」が開催されたこと(査読委員候補の選定)
- 不明1 「査読審査員の数」(一論文を何人で査読するか)
- 不明2 「査読規定・基準」

2001年3月31日 原稿締切り

(経緯) 編集委員会開催・査読委員候補選定

2001年5月18日 委員会・査読委員候補承認

(経緯)

2001年7月2～11日 受理日

(経緯)

2001年10月6日 発行

発行日

「2001年5月18日」の委員会で、『第11号』の価格が決定された。『同号』の発行日も「2001年5月18日」である。『第12号』は未確認だが、同様であろう。

委員会開催(2001年5月18日) = 価格他決定 = 発行日(同年5月18日)

査読委員候補の承認

2001年5月18日に、「2001年」と「2002年」の「査読委員候補」が承認されている。この候補は、『何号』用か。「号数」でなく、「年」で報告されており、『第12号』(2001年3月31日 原稿締切り)用かは未確認である。可能性は二つ。

可能性1 『第12号』論文の査読委員候補は、それ以前に承認されていた。

可能性2 『第12号』論文の査読委員候補は、同委員会で承認された。

常識では、「3月31日」に原稿が集まり、それを踏まえ「査読委員候補」が人選され、「5月18日の委員会で承認」された運びで理解できる。ただし未確認。注目すべき点は、「2002年用候補」が、「2001年5月18日」に承認された事実である。

原稿締切り日 推測される査読委員候補承認日

第12号 2001年3月31日 (2001年5月18日・査読委員候補承認?)

第13号 2001年10月31日 (2001年5月18日・査読委員候補承認?)

第14号 2002年3月31日 (2001年5月18日・査読委員候補承認)

第15号 2002年10月31日 (2001年5月18日・査読委員候補承認)

網掛け部分に、「違和感」がある。「2001年5月18日」時点には、『第14号』や『第15号』

の原稿は、皆無かごく少数のほずである。原稿の有無とは別に、「事前」に「査読委員候補」が人選、承認されている。ただし、『第12号』の実状は不明である。

査読委員

査読者は投稿論文の主題に関連した領域ですでに優れた研究業績をあげているいわば権威者である。(古谷野巨・長田久雄 前出172頁)

通例、「査読委員」(候補)は、通例、「編集委員会」が人選する。従って、「編集委員」は、各分野の「しかるべき権威者」を熟知しておくことが原則となる。当然、学界有力者や当該分野の研究者のアドバイス(註 秘密裏に)を受けることもあろう。

『数理社会学』の審査委員

「数理社会学会」を例示する。日本考古学協会も、未確認だが、おそらく同様であろう。ただし、「人数」は不明である。

- 7 投稿の採否は編集委員会において決定する。なお、論文、研究ノート、書評論文については、編集委員会が委託した複数の匿名の審査委員による審査を行う。
(『数理社会学』の「投稿規定」)

編集委員

『第12号』の「編集委員」は公表されている。ご苦労様である。なぜか、表記の順番が変化している。なお、『第10号』は、匿名希望の「TH」さん以外、編集委員の明記はない。公表の仕方も、各号によって異なるようである。

編集委員 車崎正彦(東京都) 田崎博之(愛媛県) 鈴木保彦(神奈川県)
小松正夫(秋田県) 黒沢浩(千葉県) 寺島文隆(福島県)
(『第11号』171頁)

編集委員 田崎博之(愛媛県) 鈴木保彦(神奈川県) 車崎正彦(東京都)
黒沢浩(千葉県) 寺島文隆(福島県) 小松正夫(秋田県)

二十一世紀型・論文審査システム

1999年1月2日の英国医師会誌であるBMJ誌で、編集委員長のスミス (R. Smith) は、論文審査の匿名性をめぐる新しい提案を行った。それは、レフリエー名を匿名にせず公開して審査するというものである。

(根岸・山崎 前出150-151頁)

世界の「メガトレンド」はこうである。既に、「査読のてびき」や各号の「査読員名」を公表している学会もある。例えば、『環境社会学研究』(環境社会学会)で、「本号の査読員」(2001年『同 第7号』222頁)というコーナーもある。「査読のてびき」の「枠組」を紹介する(註 詳細は同号参照すべし)。

- 1 一般的な指針
- 2 具体的な留意点
 - (1) 課題の設定と立論の照応
 - (2) 全体の構成
 - (3) 独創性と先行研究の理解
 - (4) 文章表現と解釈の妥当性
 - (5) 形式的な整備
- 3 コメントの書き方
- 4 査読結果

原稿と査読審査委員

5月18日の委員会による承認を受け、「編集委員」が、「査読者」に「論文」を送ったと推定できる。以降で「特別な日」となると、「査読結果が編集委員会に到着した日」の可能性が浮上する。受理日は「7月2日~11日」。「6月末」までに「査読結果の提出」が要請されたのではないかと(未確認)。出し遅れや郵便事情を考慮すると、こんなものだろう。

2001年3月31日 『第12号』原稿締切り
(経緯) 編集委員会(上記6名)

査読委員候補「2001・2002年」選定（第12号用？）

2001年5月18日 委員会・査読委員候補承認

（経緯） 原稿発送

査読委員査読

2001年7月2～11日 受理日（査読結果の到着？）

（経緯） 編集・校正・再校正・印刷完了

委員会・値段決定

2001年10月6日 『第12号』発行

人生様々・論文様々

査読には少なからぬ時間を要する以上、査読者に回すのがためられた原稿もあった。「編集ノート」（2001年『環境社会学研究 第7号』環境社会学会221頁）

査読結果が到着すると、編集委員会は、「結果（評価）を尊重」しつつ検討し、問題がなければ「収録論文」（A）に決定する。問題あれば、二方向で処理される。「修正後収録」（B）と「落選」（C）である。Bには、「同号収録」（B1）の場合と、「次号以降収録」（B2）の場合がある。同論文は、実際に収録されており、「A」か「B1」のはずである。

コースA そのまま収録

コースB1 修正後・同号収録

コースB2 修正後・次号以降に収録

コースC1 落選後、大幅に書き直した後、再度、投稿（以降、不明）

コースC2 落選後、再研究し、新論文を投稿（以降、不明）

コース推察

「7月上旬」に「査読結果」を回収し、「コース決定の編集委員会」を開くのは、早くとも「7月中頃以降」である。同時に、「10月6日」発行までに、「査読結果検討・修正要請・原稿修正・再査読・編集委員会」＋「郵便事情・編集・校正・印刷・最終委員会」などの時間的経過が必要となる。「B1」の論文を『同号』に掲載するのは、物理的に難しい。同論文は、審査に「合格」（A）し、そのまま収録された可能性が高い。収録6論文の「受理日」が共通し、加えて同論文に「修正痕跡がない感じ」からも推察できる。

日本民族学会誌「民族学研究」掲載原稿に関する査読規程

(目的)

第1条 日本民族学会は、学会誌「民族学研究」に掲載される「論文」、「研究ノート」、「資料と通信」等が、学術研究にふさわしい高度な水準を保ちうるように、査読の制度をおく。本制度の運営については、編集委員会が責任を負うものとする。

(査読者)

第2条 編集委員会は、投稿された「論文」、「研究ノート」、「資料と通信」等（以下論文等という）1編につき原則として2名以上の査読者を選定し、査読を依頼する。

(査読者の匿名性)

第3条 査読者は匿名とする。編集委員会は査読者名を公開しない。

(査読方法)

第4条 査読者は、査読対象論文等に対して、次の各号につき可、不可の評価を行う。

[審査事項]

I 内容

- 1) 民族学・文化人類学研究としての主題の妥当性
- 2) 民族学・文化人類学への寄与度
- 3) 素材・資料の妥当性
- 4) 素材・資料の提示方法
- 5) 結論の提示方法
- 6) 論理展開の明確さ
- 7) 内容の正確さ
- 8) 内容の完成度
- 9) 原稿区分（「論文」、「研究ノート」、「資料と通信」等）の適切さ

II 表現

- 1) 表題の適切さ
- 2) 文章の表現力
- 3) 文章の読みやすさ

III 形式

- 1) 節・項など全体構成の適切さ
- 2) 原稿枚数の適切さ

IV 図表等

- 1) 図表の必要性
- 2) 図表の作成・説明の適切さ

V 文献

- 1) 引用文献の妥当性
- 2) 文献引用の適切さ

VI 欧文要旨（原稿区分が「論文」・「研究ノート」の場合のみ）

- 1) 論文の主旨表現の妥当性
- 2) 査読者は、前項の評価に基づいて、総合的判断として、次の4段階の判定を行う。

[判定]

A 掲載可

- 一 このままで掲載可
- 二 指摘箇所訂正後可（再審査不要）

B 訂正後再審査

- 一 内容の問題点について照会を必要とする
- 二 大幅な書き換えを必要とする
- 三 投稿区分の変更を必要とする

C 掲載否

- 一 既発表
- 二 民族学会誌として不適当
- 三 内容不可
- 四 その他

D 判定不能

- 一 一部他分野の専門家の判断を必要とする
- 二 その他

- 3 査読者は、総合評価および判定について、編集委員会に対して意見を述べなければならない。
- 4 編集委員会は、査読結果を投稿者に通知する。

(掲載原稿の決定)

第5条 編集委員会は、査読者による査読結果を十分に斟酌して、掲載原稿を決定しなければならない。

- 2 掲載原稿の決定は、編集委員の過半数の賛成によって行う。

(規程の改正)

第6条 本規程の改正は、民族学会理事会において、出席者の過半数の賛成をもって承認されたときに成立し、可否同数のときは議長の決するところによる。

付則

この規程は平成12年4月1日より施行する。

第5図（出典『民族学研究 第66巻 第2号』2002年・複写）

模範となる査読審査システム

日本考古学協会の「査読審査システム」（「受付後の処理システム」）は不明である。「査読規定」を公開している『民族学研究』（日本民族学会）を、「模範」として例示する（第5図）。「査読方法・審査事項」を詳細に規定しており、実に参考になる。これが存在すると、投稿者は、「各事項を遵守」しつつ、論文を書くことが可能で、結果的に「高品質の論文」になる。結構なことである。

人間様々

フランシエスコ・アルベローニによれば、人間には「60種類」（1997年『他人をほめる人、けなす人』大久保昭男訳 草思社）ようである。大別的には、「日常的に会う人」・「人の上に立とうとする人」・「社会を支える人」・「よりよく生きる人」・「自分らしく生きる人」である。それぞれ、「他人を認めない人」とか、「繰り返すだけの人」とか、「つまずきに耐えられる人」とか、「先入観にとらわれない人」とか、実に様々な「細別」がある。

私自身の自己評価は、「楽観的な人」（10頁）・「皮肉っぽい人」（14頁）・「インスピレーションにしたがう人」（182頁）である。この「複合人間」が、読者の目にどう写ったか。

おわりに

以上、「論文講読」・「論文執筆」などに関する文献を紹介しつつ、「論議の対象となる論文」を選び、諸問題を論じてきた。本稿の読者は、いささか「違和感」を実感されたに違いない。とにかくも、「読了」に感謝する。同論文は、厳しい「査読審査」を経て、『日本考古学 第12号』に収録されたはずである。有望なる同論文著者の「前途」に期待する。

謝 辞

文末ですが、かつて、私に「初論文」を発表する機会（「石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究 82』1974年 考古学研究会）を与えて下さいました、近藤義郎・岡山大学名誉教授と都出比呂志・大阪大学教授の学恩に、深く感謝いたします。

学恩は羽毛蒲団の暖かさ 龍一